

## コロナ禍における日本語教育課程 (JLP) の取り組み

武田 知子

### 1. はじめに

2020年春、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、教育機関は感染拡大防止と教育の継続という困難な課題に直面することとなった。文部科学省は、3月24日に「令和2年度における大学等の授業の開始等について」という通知を出し、学生の学修機会を確保し、感染リスクに備える方策として、遠隔授業の活用をあげている。国際基督教大学においても、3月16日に教養学部での全面オンライン授業実施の特例措置が決定され、それに伴い、日本語教育課程 (以下 JLP) を含むプログラム内でも特例措置の検討を求める要請があった。様々な状況を検討し協議した結果、JLPでのプレイスメントテストと全プログラムのオンラインによる実施を決定した。本稿では、JLPでのオンライン・プレイスメントテスト、及びオンライン日本語授業の実施状況を報告し、利点や問題点を明らかにするとともに、今後の課題について検討する。

### 2. オンライン・プレイスメントテスト

JLPでは、学生が適切なレベルで学習を始めることができるよう、春と秋学期の年2回、新入学生にプレイスメントテストを行い、履修プログラムを確定している。例年、日本語学習背景から継承語プログラム (特別日本語プログラム、以下 SJプログラム) か外国語としての日本語プログラム (以下 Jプログラム) かが判断され、その後、それぞれのテスト (SJプログラムは、読解・漢字・作文、Jプログラムは文法・語彙・漢字・読解作文) を対面で実施していた。しかし、近年学生の背景や学習方法の多様化に伴い、筆記試験のみでは適切なレベルにプレイスすることが難しくなっており、授業開始後のプログラム移動で授業運営に支障をきたすという問題が起きていた。また、テストの結果、希望するレベルのコースに入れないことで、学生の学習意欲が削がれることもあった。さらに、CEF-R基準に従い言語運用能力の育成を授業目標とする JLPの現状には、学生の日本語運用力を測るようなプレイスメントが望ましいのではないかと考え、2020年春学期から、実験的にプレイスメントテストの形態を変更することを予定していた。

その変更とは、対面でのテストは作文のみを実施し、SJプログラムは教員によるレベル判定を経ての授業登録、Jプログラムは JLPの授業内容と日本語学習歴により希望のプログラムを登録するというものである。SJプログラムと Jプログラムで、コース登録のプロセスが異なるのは次のような理由からである。まず、SJプログラムは JLP独自のプログラムであり、日本語学習歴のみならず家庭での言語・文化環境、日本での教育背景など、様々な観点からレベル判定を行う必要があるため、教員による判定が望ましい。しかし、Jプログラムは、自らの日本語学習歴を参照し、どのコースを登録すべきか学生が判断できると考えたためである。ただし、どちらのプログラムも、

学生の登録で履修が確定するのではなく、授業内での面接、及び学生の日本語でのパフォーマンスを見て、最終的には教員がレベルの適切性を判断することになっている。また、SJ 漢字コースについては、どのレベルのコースから履修するかを学生が判断し、漢字コースの免除を希望する者のみ、免除試験を受けるようにした。予め、学生の力を測る期間を春学期の授業スケジュールに組み込んでおくことで、コース移動があっても授業運営に支障をきたさないようにする方針を教員全員で共有していた。

この実施形態の変更予定が、コロナ禍で急遽オンライン・プレイスメントテストを実施せざるを得なくなった状況において幸いした。もともと計画していた対面での作文テストを Moodle への作文提出に、授業内での面接を Zoom での面接に切り替えるという変更で実施が可能となったからである(表1)。表2に実施までのスケジュールを示しているが、3月19日にオンラインでプレイスメントテストを行うと決定した後、実施までの準備期間は2週間弱である。事前に教員間で「授業開始後に学生の日本語でのパフォーマンスを見てレベル判定を行う」という合意がなされていなければ、このような短期間での実施は不可能であったと思われる。

表1 オンライン・プレイスメントテストの進め方

SJ プログラム	① Moodle に作文を提出、②教員によるレベル判定、③指定されたレベルのコースへの登録、④授業内での面接、パフォーマンスを見てコースを確定
SJ 漢字 プログラム	JLP ウェブサイトを見て、学生が履修レベルを決めて登録、漢字コース免除を希望する場合は、春学期は履修せず、秋の免除試験を受けるよう案内
J プログラム	① Moodle に作文を提出、②授業内での面接、パフォーマンスを見てレベルを確定

表2 オンライン・プレイスメントテスト実施のスケジュール

3/19 (木)	JLP 臨時会議、プレイスメントテスト、春学期授業のオンライン化の決定
3/31 (火)	レベル判断のための JLP ウェブサイト立ち上げ
4/1 (水)	Moodle でオンライン・プレイスメントテストの案内、作文受付開始
4/3 (金)	プレイスメントの作文締め切り
4/6 (月)	SJ プログラム 作文判定会議、判定結果のメール連絡
4/7,8 (火・水)	履修登録日
4/9 (木)	コース担当者から登録学生に面接日をメール連絡
4/10,13,14 (金・月・火)	登録学生と Zoom による面接、レベル確定
4/22 (水)	履修登録変更の締め切り

表3に、春学期のオンライン・プレイスメントテストの利点と問題点を整理した。面接期間を3日間設けたことで、レベル判定が難しい学生と十分に話す機会を持てたこと、前後のコース担当者が同席して面接を行えたこと、その結果、学生が納得してコースに入れたことなどの利点があげられた。また、Zoomの利用により、場所の移動による時

間の制約もなかったということも、面接を効果的に行えた要因の一つであろう。

問題点としては、日本語力に偏りのある学生のレベル判定の難しさがある。この点については教員間で話し合いを重ね、偏りがある場合に、どのように判定をするかの基準を精査する必要がある。

表3 プレイスメントテストの利点と問題点

利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・面接期間に、前後のレベルのコース担当者が同時に立ち会っての面接が可能になり、レベル判定が行いやすくなった</li> <li>・十分に話し合う時間が設けられ、学生が納得してコースに入れた</li> <li>・希望するコースに入れたため、学生は学習意欲を維持して学べた</li> </ul>
問題点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の能力に偏り（文法力はあるが漢字語彙力が弱い等）があり、適切なレベル判定の見極めが困難</li> </ul>

春学期に初めてオンライン・プレイスメントテストを行ったが、大きな混乱もなく無事に学生を適切なレベルのコースにプレイスすることができたと思われる。ただし、春学期は、受験者が30名と少なく、面接人数もそれほど多くなかった。秋学期は例年新入生の人数が多く、対応はさらに複雑になると考えられる。人数が多くなった場合、どのようにプレイスメントテストを実施していくのが望ましいのか、今後も検討をしていきたい。

### 3. オンライン授業の実施状況と授業における取り組み

#### 3-1 オンライン授業の実施状況と授業形態

新型コロナウイルス感染拡大前の大学学年暦では4月9日（木）が授業開始日となっていたが、全学として、開始後2週間は学生に自習課題を与え、オンライン授業は4月23日（木）開始で5月6日（水）までと定められた。教員は開始までの2週間でオンライン授業への準備をするようにとのことであった。当初は対面授業に切り替わる可能性も示唆されていたが、4月2日には全学期を通してオンライン授業を行うとの決定がなされた。

JLPでは、前節で示したように授業初日である4月10日（金）から、それぞれのコースで学生との面接を行い、様子を見て緩やかに授業を開始することとした。また、その判断はコーディネーターに委ねられた。そして、4月23日（木）には全学に合わせて、オンライン授業を本格的に開始した。

表4に2020年春学期各コースの履修人数、学習管理システム、授業形態を示した。

コロナによって登録学生数が減ることが予想されたが、学生数の多かった2019年春よりは34名減となったが、一昨年の2018年春よりも4名増という結果だった。JLP履修者の延べ人数は6月10日時点で217名、重なりのある漢字コースを除くと157名であった。その内、Jプログラムは128名で、海外からの参加が51名（米国17、韓国11、イギリス6、中国5、台湾4、タイ2、インドネシア・イタリア・メキシコ・マレーシア・ドイツ・フランス各1名）であった。51名中48名がJプログラムを履修しており、Jプログラムでの海外からのリモート参加者は約37.5%であった。

学習管理システムについては、全 18 コース中、6 コースが Moodle、12 コースが Google Classroom（うち 2 コースは Moodle と併用）を使用して授業を行っていた。教員の準備期間が短いこともあり、普段使い慣れている学習管理システムを用いて授業を進めるとしていたが、中国からの履修者がいる場合、Google Classroom を使うことができないという制約があった。その場合、Moodle を使用して授業を行う必要があった。

表4 履修人数と学習管理システム、授業形態

	コース名	履修人数（うち海外）	学習管理システム	授業形態
J プ ロ グ ラ ム	Step by Step	3 (1) 名	Google Classroom Moodle	同期・非同期混合型
	J1 (初級 1)	4 (1) 名	Moodle	同期型
	J2 (初級 2)	6 (1) 名	Google Classroom	同期型
	J3 (初級 3)	22 (10) 名	Google Classroom	同期・非同期混合型
	J4 (中級 1)	19 (12) 名	Google Classroom Moodle	同期・非同期混合型
	J5 (中級 2)	23 (7) 名	Google Classroom	同期・非同期混合型
	J6 (中級 3)	14 (3) 名	Moodle	同期型
	J7 (上級)	26 (12) 名	Moodle	同期・非同期混合型
	日本語演習 A	11 (1) 名	Moodle	同期型
	中級語彙漢字 1	4 限 13 (3) 名 / 5 限 12 (5) 名	Google Classroom	同期型
中級語彙漢字 2	4 限 5 (2) 名 / 5 限 10 名	Moodle	同期型	
S J プ ロ グ ラ ム	SJ1	3 (1) 名	Google Classroom	同期・非同期混合型
	SJ2	7 (2) 名	Google Classroom	同期・非同期混合型
	SJ3	16 名	Google Classroom	同期型
	SJ 漢字 1	2 名	Google Classroom	同期型
	SJ 漢字 2	7 (2) 名	Google Classroom	非同期型
	SJ 漢字 3	11 名	Google Classroom	非同期型
	論文作成	3 名	Moodle	同期型

授業形態は、18 コース中 9 コースが Zoom での同期型授業を行い、同期型と非同期型との混合型は 7 コース、非同期型のみは 2 コースであった。この決定には、学習内容のみならず、コース内でどの程度時差対応が求められるのかが影響していた。日本との時差が大きい学生にとって、日本時間で行われる授業への参加は非常に難しい。また、学生の Wi-Fi の容量により授業参加が制限される学生もいた。そのため、担当者は学生の参加状況を配慮し、授業運営をせざるを得ない状況であった。学期中の会議やコース終了後の報告会では、教員が学生の状況、学習環境に合わせ、様々な工夫をしながら授業を進めていたことが報告された。次節でその取り組みについて紹介する。

### 3-2 授業における取り組み

感染症の流行という不測の事態によるオンライン授業ということで、教員、学生共に戸惑いながら過ごす学期となった。そのような状況の中、JLP 教員が様々な工夫を行って授業を運営していた様子が、春学期のプログラム報告書から見て取れる。その実践は大きく、①教材の工夫、②指導法の工夫、③コミュニケーションを活性化させるための工夫、の3点から整理することができる。

教材の工夫については、通常の授業教材の準備に加え、学生の自習のための教材、ビデオ教材、オンライン確認テスト等の新たな教材を作成するほか、既存のオンライン教材の活用、時差により参加できない学生のための授業録画及びその配信等を行っていた。

指導の工夫としては、授業で扱う内容や進度の変更、オンライン授業のための新たなプログラムデザインの作成、授業サイクルのルーティン化（同じ時間に同じ授業内容を行う等）、個別対応の重視（時差を考慮して授業時間外にも授業を行う、個別指導を週に1人につき30分行う、LINE電話での個別指導等）等の取り組みを行っていた。また、学生の進捗状況に応じて、課題の量やZoomでの授業時間を増減する等、臨機応変な対応をしてオンライン学習が円滑に進むよう配慮をしていた。

さらに、オンラインでの教員と学生、学生間のコミュニケーションを活性化するための工夫も行っていた。先にあげた個別指導での学生との対話は、日本語指導の場としてだけでなく、学生の日々の悩みや不安をサポートする場としても重要視されていた。また、Zoomでのブレイクアウトルーム、学生同士の交流の促進のためSlack、LINE等のツールを活用し、学生同士の対話の機会を増やすほか、日本人学生との交流の機会をつくる等の取り組みも行われていた。

## 4. オンライン授業の利点と困難な点・問題点

新型コロナウイルス感染症の収束は未だ見えない状況であり、しばらくはオンライン授業を行っていくと考えられる。ここでは、春学期に行ったオンライン授業の利点と問題点を整理し、今後の授業運営の参考としたい。

### 4-1 利点

オンライン授業を実施した利点に関連する項目を表5にまとめた。

表5 オンライン授業でよかったこと

学生の授業参加・課題提出・成績について
<ul style="list-style-type: none"><li>・従来より遅刻欠席が少なかった</li><li>・非同期型授業のため、欠席しがちな学生も自分のペースで学習できた</li><li>・学生が自室でリラックスして授業が受けられた</li><li>・課題の提出先や期限が学習管理システムで示され、期限を守る学生が多かった</li><li>・成績評価の内訳の変更や通常授業とは違う条件（授業を休んでも宿題は提出できる、クイズは出席しなくても受けられる、クイズを手書きではなくタイプで行った等）だったためか、通常の授業よりも成績がよかった</li></ul>

学習管理のしやすさ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習管理システムで教材や学生の提出物を一元化でき、管理がしやすかった</li> <li>・提出物がオンラインで見られるため時間的制約がなかった / 提出物を教員間で共有しやすい / フィードバックの際コメントしやすい</li> </ul>
Zoom などツールを使用する利点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・画面で教師と学生の顔が並び距離が近いように感じたためか、学生の発言が多かった</li> <li>・発表の録画が容易にでき、振り返りに役立った</li> <li>・Zoom での教材共有で、学生が聴解練習をしやすかった</li> <li>・自宅で授業をする場合、語彙説明の際、自宅にあるものを例として提示することができ、教室よりも例示のリソースが多く、進めやすかった</li> <li>・Slack によるチャット形式での意見交換で、対面では口が重い学生が積極的にコメントしたり、議論が深まっていく様子が見られた</li> </ul>

学生の授業参加に関するものとして、通学時間がなくなり学生の出席率が上がった、学習管理システムの使用で、締切日や提出状況を学生が自分で確認できるようになったことから提出率が上がったという利点があった。それに関連してか、J6、J7 といった中上級コースでは学生の成績が従来よりもよかったという報告もあった。

教員としても、学習管理システムの使用で、課題提出の把握や他の教員との共有がしやすくなったというメリットがあった。また、Zoom やその他のオンラインツールの活用により、授業活動や発表の振り返り等が行いやすくなった、学生の学びを促進することができたという利点もあげられていた。

#### 4-2 困難な点・問題点

オンライン授業での困難点・問題点を表6にまとめた。

最も多くの教員が問題点としてあげていたのは、時間と労力がかかったという点である。3月下旬にオンライン授業の決定がなされてから、オンライン・プレイスメントテストへの対応、授業準備等、その仕事量は膨大なものであった。添削のために、タッチペンなどを使用しオンラインで対応できた教員もいたが、4月、5月はそうした電子機器が入手しにくく、「学生の課題を印刷しコメントを入れた後スキャンしたファイルを学生に返却」という作業を行わざるを得なかった教員も多かった。また、授業スケジュールの組み替え、教材の作成、学生や担当教員間の連絡、時差対応のための授業外での指導、と仕事に終わりがなかった。さらに、時差のある学生のために授業時間外に追加で授業を行った教員もいた。

一方で、学習の質の担保が難しいという点も指摘されていた。時差対応で非同期型を併用する場合、指導時間や学習内容を通常授業より減らす必要が出てくる。オンラインでは学生が自習の学習環境下で、どの程度理解しているのかを把握しにくいこともあり、通常学期に比べ学習の質が低くなってしまったと感じている教員も多かった。また、帰国要請や自粛要請により、日本語との接触頻度が少なくなった影響は特に初級では大きく、通常学期と比べて日本語力が伸び悩んだとの報告もあった。

また、学習環境、指導環境が整っていないことへの困難も多数報告された。特に Wi-Fi や使用機器の問題は同期型授業においては運営に支障をきたすものであった。これらは教員として対応が不可能なものであり、問題が起こったときに適宜判断を迫られた。

表6 オンライン授業での問題点

<p>時間と労力がかかる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容とスケジュールを練り直すための準備時間が十分ではなかった</li> <li>・教材作成、ビデオ編集、確認クイズを作成するのに膨大な時間がかかった</li> <li>・オンライン添削、宿題をスキャン、メール添付する等に時間がかかった</li> <li>・授業のセッティング、学生へのフォローが大変だった</li> <li>・すべてのやりとりをオンラインで行うので、通常より時間が必要だった</li> <li>・時差への対応のため、授業外で指導を行った</li> </ul>
<p>学習の質の担保が難しい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通常学期と比べ学生にとっての授業時間や学習内容が少なくなった</li> <li>・オンライン授業だけでは練習量が不足、練習の種類も限られる</li> <li>・自習でどこまで学習内容が理解できたか疑問が残った</li> <li>・圧倒的に日本語との接触頻度が低い、特に初級は日本語力の伸びが見られなかった</li> <li>・初級では日本語でのやりとりの機会を増やす、聞く、話す力が伸ばせるような教材の開発が必要</li> </ul>
<p>学習環境・指導環境の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加している国の違いや、時差により同期型授業ができない</li> <li>・学生の状況（Wi-Fi、学習環境、精神的状態）の問題</li> <li>・学生の使用デバイス（PC かスマホかでも状況が違う）の違いによる制限</li> <li>・教員側の在宅授業（Wi-Fi、家庭環境、子供の在宅等）の問題</li> <li>・教員が様々なツール（Zoom など）の操作法に熟知していない</li> </ul>
<p>学生側の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な授業から出る課題の多さ</li> <li>・自律的に学習を進める非同期型が難しい学生の存在</li> <li>・環境の変化（コロナ禍の不安、学期途中での帰国等）で、安定してない</li> <li>・授業のシステム（宿題の出し方、クイズの受け方）を理解するのに時間がかかる</li> <li>・指示した以外のファイル形式で提出物を出す</li> </ul>
<p>授業運営の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通常だと教員同士が廊下で顔を合わせ、立ち話をする等お互いの様子が把握できるが、オンラインだと必要最小限の情報しか共有されなくなりがち</li> <li>・担当教師間での指導に関する情報共有のしにくさ</li> <li>・教師間の役割分担の割り振りの難しさ</li> <li>・プログラムコーディネーターの負担増（他の教員との連絡、業務の進捗状況の確認等）</li> </ul>
<p>オンラインでの対応が困難</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Zoom の限界（ブレイクアウトルームで教員が全ての内容を把握することができない、ブレイクアウトルームでの話し合いが苦手な学生、カメラをオフにする学生の存在）</li> <li>・対話的な活動（話し合い、ディスカッション、インタビュー）がしにくい</li> <li>・学生間の繋がりをオンライン上でどのように構築するか</li> <li>・学生の様子をこまめに把握するのが難しい</li> <li>・4月入学の学生の大学への適応の問題（キャンパスに来たことがない、友達ができない等）</li> <li>・テストやクイズの進め方、不正をしていないのか確認ができない</li> <li>・手書き解答の提出、クイズの提出が難しい（アップロードに時間がかかる）</li> </ul>
<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題にオンラインで添削し返却しても学生が見ているのかわからない</li> <li>・海外にいる学生の日本語学習意欲の維持が難しい</li> <li>・時差を理由に授業に参加しない学生への対応をどこまで許容するか</li> </ul>

前節の利点では、オンライン授業があっただけで学習がうまくいった学生もいたが、反対に授業のシステムや課題の提出に関する指示をなかなか理解できない学生もいた。加えて、コロナ禍の不安定な状況で精神のバランスを崩す学生もおり、学生への対応や支援にも通常より時間がかかるプログラムもあった。

授業準備、学生への対応のみならず、オンラインによる教員間の連絡、授業プランの変更などプログラムコーディネーターとしての業務も複雑かつ膨大なものであった。オンライン授業の業務を非常勤講師に依頼する際も、通常的时间単位での依頼とはならないこともあり配慮が必要となった。その点についても難しさとしてあがっていた。

オンラインで行いにくかった項目として、語学教育で重要な学習者同士のインタラクティブな活動を活発にする活動の実施が困難であるという点があり、学生同士のつながりをいかに構築していくかが課題として残った。また、授業で直接会うことができないため、学生の様子をこまめに把握することが難しく、個々の学生が抱える問題に気づいてもすぐに対応がしにくいという問題点も指摘された。

さらに、日本語の書き方の習得に重要な役割を果たす、手書きでの練習や課題、テストの実施もオンライン上では行いにくいという点も問題であった。テストの実施についても、不正が行われていないのかを確認する方法がなく不安だとの声があった。オンライン授業を実施する場合、従来対面で行っていたテスト方法で評価をすることが難しく、オンラインに適した新たな評価方法を JLP として模索していく必要がある。

その他、苦勞して課題に添削をしてオンラインで返却しても、学生がどこまで見ていいのかわからない、リモートで海外から受講する学生の動機づけの問題、時差対応をどこまでするのかの判断が難しいなどの点が問題点としてあがっていた。

## 5. 今後の課題

以上、2020 年春学期における JLP でのオンライン・プレイズメントテスト、及びオンライン日本語授業の実施状況を報告し、利点や問題点を明らかにしてきた。春学期のオンライン授業は準備期間も短く、試行錯誤で実践を行ってきた。利点であげられた学生の授業への参加度や課題の提出率を促進するようなオンラインツールの活用や、学習管理のしやすさを生かしつつ、いかに問題点を克服していくかが今後の課題である。

## 参考文献

文部科学省ホームページ「新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/index.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index.html)（検索日 2020 年 10 月 28 日）

（武田知子—国際基督教大学）